



meet again



gajile

漢

---

「貴様ッ!!何者だ!!この国の者ではないな!?」

漢帝国、宮殿の門番が馬を連れた一人の男に向かって抜刀の構えをする。

男は冷静に鋭い眼光を放ちながら言った。

「…黙れ。我名は張騫」

その名を聞くと門番達は慌てて構えをといた。

「ちょ、張騫様でございましたか!!とんだご無礼をッ!!張騫様の事は噂に聞いております!!」

「ええい、黙れ!!武帝様の所へ連れていけ!!」

「し、しかし…」

「私は武帝様の直属の部下だぞ!!信用出来んのかッ!!」

「も、申し訳ありません」

張騫

彼は漢の皇帝、武帝から大月氏国へ遣いの命を受け、様々な困難を乗り越え、今、12年ぶりに漢帝国に姿を現した者である。

12年の長い歳月の間、張騫の名は宮殿の中で伝説となりつつあった。

「何者だ」

宮殿内の騒ぎに玉座に座る武帝は部下に向かって低い声をあげた。

「は。張騫が只今、この国に戻ってまいりました」

武帝はピクリと眉を上げる。

「張騫だと??」

「今、そこまで来ております」

皇室の手前、12年ぶりの姿がそこにある。

武帝は焦りを覚えた。

張騫に会えるのは嬉しい。

だが、もし彼が転んでいたら。

「…入れろ」

しかし武帝はその考えを一掃した。

懐かしの姿は傷だらけで、未だあの時の、忠誠を誓った目をしているではないか。

「…ぶ、ぶて、いさま…」

張騫は気が抜けたのか、へろ、と足をよろめかせ部下に支えられる。

「張騫」

武帝の声を聞き、我に返った張騫は手に握りしめた文を部下に渡す。

「大月氏国の皇帝から文を預かりました。遅くなり、申し訳ありません」

部下がそそくさとその文を武帝に渡す。

武帝は無言で文を開け、黙読した。

「…そうか」

「大月氏国は匈奴とは関わりたくない様子。残念ながら…」

「…わかった」

「しかし、武帝様、確かな情報を掴んでまいりました」

「言うてみよ」

「大月氏国の北にフェルガナ、西に安息という国がございます。そしてその国は匈奴と因縁がある様子。これはチャンスでは…」

「なんと」

張騫は跪きながら続ける。

「わたくしは匈奴に捕まった後、大人しくし、奴等に信頼をさせ、そして役所で働いてまいりました。匈奴の内側の事は把握し…把握…はあくしております」

今にも倒れそうな彼の姿に武帝は黙って頷き、震える声で言った。

「よい。今日はもう休め。疲れておろう」

「…は、…」

直後、張騫は糸が切れたようにその場に崩れ落ちた。

翌、夜…

張騫が目を開けると、周りにはきらびやかな品々がそろっていた。

「っ!!」

見覚えがある。

この部屋は…

「起きたか」

武帝が椅子に座り、こちらを見ていた。

張騫はゆっくりと起き上がり、その名を呼んだ。

「…武帝、様」

武帝はそれに応えるように立ち上ると、ナイフを取り、おもむろに張騫に手渡した。

「…??」

「刺せ」

「なっ!!」

「お前が匈奴に捕まっている間、お前は転んだか」

「転ぶわけがございませぬ!!」

「今わたしは丸腰だ。部下もここにはおらぬ。わたしを殺すにはいまがチャンスだ」

「何をおっしゃるのですかっ!!」

張騫は耳を疑い、目の前の武帝を凝視する。

しかし武帝は何も言わず、張騫を見返すだけだった。

張騫はゴクリと生唾を飲み、言った。

「ならば、今もう一度、貴方様に忠誠をお誓います」

「...??」

「私は貴方様の為なら腕をも切り落としましょうッ!!」

「!!待て!!」

ナイフを振り上げた張騫の手が腕の直前で止まる。

腕の方に視線がいっていた張騫は武帝を見る。

「...あ...」

武帝は、静かに涙を流していた。

「よい...よい、お前の忠誠心の強さは昔から知ってる。信用できなくてすまなかった」

「...っし、しかし、疑うのは当然でございます」

張騫はゆっくりとベッドから抜け、武帝の前に跪き、ナイフを武帝に捧げる様に渡した。

武帝は涙を拭い、黙ってそれを受け取って、棚にしまいこんだ。

「...ああ、張騫、お前の体は部下に風呂にいれさせておいたぞ」

「あ、ありがとうございます...」

一呼吸の間。

「武帝様!!!!」

いきなりの大きな声に武帝は肩を震わせる。

振り向くと張騫はまだ跪き、うつむいていた。

「どうした」

「武帝様、私はっ...!!」

言葉に詰まる張騫に武帝はもう一度後押しをする。

「面をあげて言うてみよ」

「わ、わたくしは...!!」

張騫は勢い良く顔をあげ、少し離れた所にいる武帝を一心に見つめ、吐き出した。

「武帝さまっ、私は貴方様の事を一度も忘れた事はありませんっ」

張騫の言葉に武帝は目を見張る。

「妻子が出来た時も、片時も忘れた事はありませんでした。私はっ...いつも武帝様を心に抱き、今日、戻ってまいりました。

武帝様っ...

私は...

武帝様がおられたから

今の私がいるのです」

ボロリと彼の目から涙が流れ落ちる。

「武帝さま...」

「...」

そして

そっと笑ってみせた。

「貴方様への忠誠心は...12年前と、なんら変わっておりませぬ...」

「っ...!!」

「...ぶ、ぶていさま...??」

「張騫」

武帝はそっと抱き締めた張騫に、囁いた。

「よいか...??」

切羽詰まっているようなその囁きに、張騫は頬を少し赤らめて優しく微笑み、皇帝の名を背負う  
その大きな背中に、手をまわした。

「武帝様に抱いて頂けるのは

本望でございます...」

"ずっと想いを寄せていた"

真っ直ぐな瞳で忠誠を誓うその男に

"ずっと想いを寄せていた"

格好の良い、身分がまったく違う貴方様に

"想いを断ち切ろうとした"

だから遣いを出した

"想いを断ち切ろうとした"

だから妻子もつくった

"長い年月帰ってこなくて心配した"

もう一度お前に会いたい

"匈奴に捕まった時はもうだめかと思った"

もう一度貴方様にお会いしたい

"12年前と変わらぬお前を見て"

"12年前とお変わりのない貴方様を見て"

""好きだと思った""

神様

どうか

どうか今だけでも…

幸せを感じさせてください…——

end.